

現象学的選言説と Phenomenal Dogmatism

岡部 幹伸 (Mikinobu Okabe)

慶應義塾大学・日本学術振興会特別研究員 DC2

現象学的選言説とは知覚経験の現象的性格が、真正な知覚と錯覚・幻覚とで異なるという立場である。素朴实在論は、知覚経験の現象的性格が世界内の対象やその性質そのものによって構成されると主張する。しかし、そのような対象が存在しない幻覚の場合や、対象は存在しても経験主体が気づいているような性質をその対象が持っていないような錯覚の場合は、それらの経験の現象的性格を世界内の対象や性質では説明できない。それゆえ、素朴实在論者には経験の現象的性格に関して、錯覚や幻覚の場合に真正な知覚とは異なる説明を与えるという動機が生まれる。それが現象学的選言説である。

Phenomenal Dogmatism や Phenomenal Conservatism と呼ばれる立場は、主体に P と思える (seem) ないし現れる (appearance) ならば、阻却因子がない場合に主体は P と信じる正当化を得るという認識論上の立場である。Phenomenal Dogmatism は主体が正当化にアクセスできると主張するので、認識論的内在主義に分類される。また、「思える (seem)」ということの範囲は広く取られており、知覚、記憶、想像力、さらには倫理的直観のようなものまで含まれる。

本発表は現象学的選言説と Phenomenal Dogmatism を組み合わせた立場の帰結を検討する。Phenomenal Dogmatism の標準的な見解によると、主体に正当化を与える現われ (appearance) は面識 (acquaintance) ではない (Huemer, “Phenomenal Conservatism”)。面識はその対象の存在を含意するが、現われは含意しないと考えられているからである。しかし本発表は Phenomenal Dogmatism を現象学的選言説と組み合わせることで、その制限を外す。それにより、知覚的信念の証拠が外界の対象の知覚にあることを確保できるようになると思われる。

さらに、形而上学的選言説と認識論的選言説の関係という選言説の分類上の関係の明確化にも貢献できると思われる。

参考文献

Huemer, Michel. “Phenomenal Conservatism”, The Internet Encyclopedia of Philosophy, <https://iep.utm.edu/phen-con/>, 2025/05/04.